

*早稲田大学（文化構想学部）・熊本大学

リベンジライト

緒方水花里

私はとられた

シャッターの隙間を潜り抜ける

瞬間殺された

アリス

あれは私の光だった

現代人は皆ピストルを持って歩いている

スマートフォンという名の銃身

歩道を5億年前の流木が渡っているのに

誰も気付かない(但し流木ではない)

掌の中の死に夢中

4人で

柔らかく開くアリスに夢中

私はとられた

炸裂する光の度に

鱗が剥がれ落ちる

私ではない

私であった

私

分裂する

私

床に転がる

鱗

切った爪先

蜥蜴の尻尾

死んだ猿の手を

お守りにするのは誰？

月は本当はアメーバなのに

皆丸いと信じている

時間泥棒

私は光ではない（という光をあなたは見ている）

私は文字ではないのに（という私は文字である）

私は流れ星

熱い血と炎が流れて

真っ逆さまに落ちているその時でしかないのに

箱の中に閉じ込めないで

アリスは彼と待ち合わせただけ

待ち合わせて車庫に行っただけ

閉じ始めるシャッターの隙間から飛び出す

手を引いて

千切れる！

私の腕！

私の足！

そして分裂する私と私と私と私と

アリス

私の時間！

ねえダーリン返して

あなたが見ているそれは誰？

私は私

アリスはいつも私のかさぶたを食べてしまうの

今度は私が閉じ込める番でしょう？

散歩

濱田湧壮（熊本大学）

時計の針が頂点で重なった時間。

帰りの電車で、マツクの袋を抱えた男を見かける。

家族のために買ったのだろうかと思う。

誰かのために何かするときの笑みを浮かべている。

降りる駅が同じだったので、僕は男に付いていく。

角を曲がる背を追っていく。

男は僕より歩くのが速く、それは身長とか慣習とかの問題じゃなく、たぶん目的の問題だった。

男との距離は徐々に開いていき、僕は途中で立ち止まる。

家に入ると男は、妻と小学四年生になる息子がいないことに気づく。

ちょっとした買い物に出ているんだろうな。

待っていてもなかなか帰ってこなくて、ポテトが冷めはじめ、コーラの炭酸が抜けていく。

妻と息子は三十分ほどで戻ってくる。

二人でジムに行っていたのだが、帰りのバスが遅れたのだという。

シャワーを浴びてくると浴室に向かった妻を

男は立ち上がって追いかける。

何か、そういうタイミングだったのだろうか。

僕はそのまま一人暮らしの部屋に帰る。

服や書類や本で足の置き場がないくらい散らかっている。

僕は右足首を捻挫していて

いつもより慎重にベッドに向かう。

眠りたいのに眠れない。

中途半端に閉じたカーテンの隙間から

白んでいく空が見える。

もうすぐ職場に向かわなければ。

そういえばこれからジムに行こうと思っていたんだ、体を鍛えたいんだ。

それからその男の息子は散歩に出た。

晴れた日に知らない住宅地を歩くのが日課なのだった。

歩きながら自分が巨人になった妄想をするのだ。

巨大な手で、他人の家の屋根をはがし、壁を崩し

住人を外へと追い出す。薄暗い部屋に日の光を当てる。

日の光には人の頭をぼーっとさせ、記憶を奪う効力があつて

それですべての人が家族のことや、友達のことや、自分のことを忘れるんだ。

そして一緒に散歩するんだ、晴れた日の廃墟を。

結局眠れなかった僕は身支度を整えると、

人と会う予定のため美容院に行く。

高い金を払ってストレートパーマをかけ、眉も整えてもらう。

美容師に、手大丈夫ですかと尋ねられ、腱鞘炎なんですと答える。

僕は左手に包帯を巻いている。

駅に向かう途中で中学生くらい女の子を見かける。

誰かに似ている気がする。

女の子はぼんやり目の前のアパートを見上げていて

すれ違うとき、私もいつか結婚するんだろうな、とこぼす。

望遠鏡

菊地もね

現在地から

いつもの場所から

私から離れたかった

呑み屋のにぎわいから抜け出して

パウダールームに逃げこみ鏡を見ると

地団駄のような噛み癖で唇がぼろぼろになっていた

もうごまかすことはできないと思った

人づきあいの良し悪しがすべての場を降りる

ビルのあいまに見え隠れする月がきれいで

手ごろな紙でも数十回折れば月に届くという計算を思い出した

網膜にあらゆる景色を折りこめば

ここからいちばん遠くへ行けるはずだと信じたくて

ベランダに投げ出されているサボテンの健気な緑を、カーテンのかわりには

短いワンピースの影を、出窓に並べられたクマのぬいぐるみの丸い背中を

折りこんでみると悪くなくて

縁石の横に落ちている髪留めの、燻し銀のトンボの羽を、寒さにもかまわず
放し飼いにされているオウムの、黄色くとがたくちばしを、ツタに覆われ
た庭から逃げて、柵のすきまで静かに息をする青いバラを、取り壊しのさな
かで放置された小屋の、風呂場の壁だったとわかる唐突なピンクのタイルを、
今日も夕暮れに追いつけなかった私を待ってくれている、三時五十分から動
かない公園の古い時計台を、夜は危ないから気をつけなさいねの言いつけを
破り、真っ暗な林から見あげたスバルの白さを

この帰り道を、固有性を、目を刺す色を折りこんでみればじゅうぶん

ドアスコープからのぞく自分の部屋は

月よりもぼやけた輪郭をしている

氷河期

井上晃輔（熊本大学）

Z世代なんて名前つけられちゃって
次はどうするつもりなんでしょうね

としお叔父さん種を蒔く
狸 とことこ寄ってくる
意味ないのにね耳へ囁く
としお叔父さん鍬を持つ
狸 とことこ逃げていく

としお叔父さんみたいに
なったらいいけんのよあんたは
叔父さん勉強はできたけど

大学でぐうたらして ぐうたらしたけん
ああなったんよ
あんたは ああなったらいいけんのよ
ぶくぶく ぶくぶく 太って

自分の肉に溺れとるみたい
働き損ないの あの シボウノカタマリ
あんたは勉強できるくらいで
調子乗ったらいいけんのよ
謙虚でおらないけんのよ

としお叔父さんが
あんたにもし 話しかけてきたらね
できるだけニコニコ 笑ったときなさい

なんか返事したりしちゃ いけんけね
気づいたら

お母さん 助けに行くけんね

としお叔父さん罨を張る
狸 このこやって来る
疑似餌に尿を引っかける
としお叔父さん銃を持つ
狸 とつとと茂みへ帰る

ママはああ言うけど

パパは嫌いじゃないよ としおさん

ママは一緒に育ったから

あの人の 嫌なところも
人一倍知ってるんだろう
でもな

いいか どんな人間にも

見習うべきところと

そうじゃないところがある

パパにもある

ママにもある

それと同じように としおさんにもある

見習うべきところもあるように

そうじゃないところがある

あんたは それを見極めなさい

それも勉強だ いいか

パパが見る限りだけどね

としおさんのそれはね

ちよつとだけ致命的なんだ ちよつとだけね

としお叔父さん釣竿ふる

狸 よたよた這ってくる

コンクリの上へばってる

としお叔父さん小魚やる

狸 へばってる

もう一匹だけやる

狸 へばってる

あともう一匹やる

狸 みんな啜えてすたこら逃げる

兄ちゃん似とるよ

としお叔父さんに

デブじゃないとこ

以外は全部似とる

アルファ世代って言うんだそうです

オメガ世代まではもちますね

あとは どこで

切り分けるか ですね

雪の激しい夜

乗り合い馬車はぎゅうぎゅう

としお一人で ぎゅうぎゅう

としおの腹に

背中に腰に 心に

抱え込まれた

ブルー・ド・シユイフ 彼女こそ

としおであり また

彼女に満たされた

この馬車こそ としお である

としおは 馬六頭に引きずられる
まま

背骨じみた

か細い道を駆ける 駆けている

その傍から 傍から

狸が飛びつく

襲い来る

金玉の皮をおっ広げ

としおの窓にへばりつく

としおの車輪を絡みとる

としおの脂肪を溶かす

悪性の液体を

分泌 ぶくぶく 泡立つ脂肪

としおは みるみる 萎んで

それでも猛然と

雪の中を

背骨じみた道を 駆ける

股ずれのせいで

半歩ずつしか歩けなかった

部屋を出るのさえ億劫がっていた

寝る時につける 呼吸を楽にする

ダイバーみたいなマスクを

男性雑誌の裏に 放置して

カビだらけにした

あのとしおが

駆ける

駆けている

馬だつてとしお だつた
としおは湯気をあげる
としおは蹄を鳴らす
炎のような
息を吐き
としおは
いなく
いなく
いなく なる

くされえんの詩

かんだたくみ

1

蚊よ

きみももう疲れたろ

こんな夜中に

ぼくらのほかに動くものなんてないのに

つぶすのは怖いんだ

メガネケースで捕まえて

ベランダで手放して

ぼくはもうしずかに眠りたいんだ

こんなに追いかけまわされるのは

きみも望んでないはずだ

白壁に

見つけたとメガネケースを閉じるけれども

なにもない

ああ

いつ寝てるんだかもわからないきみのために

きょうもぼくは眠れない

ぼくらが一緒に夜を過ごすのは

もう何年目になるんだろうか

2

また来たんかね

きょうもさつさと飛んでいき

ぼくの顔を通りすぎるきみ

きみが見えると

春がきたんだなと思う

それにしてもきみたちの忙しいこと

なんて呼ばれるかもわからない小虫だけでも

みんないったいどこにいったんだろう

きみは

昨日のやつがどうなったか知ってるか

蚊だか小虫だかわからないが

ベランダから逃がして

暗闇に消えてったあいつは

あいつはまだ生きてるんだろうか

また来るんじゃないだろうか

もう3時だ

なんとか出てきてくれないか

3

きみはラジオを聴くのかい

どこからか部屋に迷いこんだらしいが

音を出すと

動きがいいような気も

するけどそもそも

聴きようがない気もする

こんな小さなからだじゃ

このまえのやつは一向に出てこなかったのに

ラジオを流すたび

きみは姿をみせてくるんだな

きみのほかに一緒に聴いてくれる人がもういないのも

これは変な話だ

どうしてこうなった

いつからだろうか

蚊を殺せなくなったのは

リスナーの投稿に笑いがおこるとき

きみは出てくる

ぼくはすかさずメガネケースに閉じ込める

そしてラジオを停止する

*早稲田大学(教育学部)

液晶越しのランデブー

竹田彩乃

ぬるくなった星屑のおとぎ話、それは約束へいざなう月夜のテロリスト、あるいは啓蒙の手がかりであるとマチネが告げる。故に、じわりと囁く心臓の口づけが夢見るは罪人へのセレナーデ。ああ、迷える孤独たちよ！ 夜もすがら、君に佇むアンタレスからのスターチスを煌々と抱きしめた。愛に連なる痛みだけが木霊して、僕は群青に揺蕩う。いかにもエントロピーの吐息らしい殺人的な陶酔が、ただとこしえの涙に横たわっている。たとえるならそれは、飽くことのないネオンに揺れる幸福な序章のひとかけだった。さあ、際限のない初恋におもねろう。やがて零れ落ちる命のしずくをカトラリーと仮定して。ここはきっと、ヨハネが生きたロンドのごとき秩序の果てだ。少女は明滅する鼓動に重なる贖罪の中で、さんざめく歌声に目覚める黙示録だったのだから。

手話

原田真慈

手話、その指先の湾は いっせいに薄の投身を透かした

その島では無風が訪れぬことをすべての人が知っている それにならう

デイクアの車を見送らなくなったことに慣れるのと同じことだった

見慣れたナンバーの運転手はわたしを見なかった、

祖母の背中、水門、腎臓の音と かつてこの岬から曳航され沈んだ鯨の叫びは

どちらも長いあいだ、春泥に似通った遺失だった、

湾に還ろうと伸びる杉の激しさ、波と稜線の繰り返す孵化のただなかにある、
卒塔婆の密林が島を手話で語りつづけていた、みな静かなのでやがて倦んだ
貯水池の水面で睡りを止めた虻の、その激しさのほかにはなにももの動かない、

そよやそよ、などて山べを見ざりけん。妹はとてもしずかに泣く、

古い皮、声は煙になるから大丈夫だと背中に置いた手の、驟雨を待つ湾の
光る すべての島でみな睡る、手と字はやがて白線として糸と雨になる。

そよやそよ、混声の水門から還ってきた湾はふたたび最初からはじまった、
わたしが懐かしい手紙のすべてを読み終えてしまうまでのあいだに。

ふるはなみだの雨なるを、春のものとやひとの見るらん。よるは波、湾の、
指先の、

拾う骨の柔らかさよ

促されるような情力で手話をやめた手の、じゅうぶんな生命、動き続ける水
門

星の草原

米司花音

王冠がある

その円環のなかに誰にも知られぬ王国がある
青々とした草原は波深くそよぐ
カルデラ湖に衛星が幾つも映って
それらもいつしか墜ち
鏡の星座は刻々と変わっていく
海の一粒が燃える八重の遠かた
私にしか見えない国がある

霧に包まれ草を食む馬がいる
柔らかな弾力を持つ草の食感を確かに受け取ることが出来る
彼らの耳が一斉に後ろを向き
汽笛が響いてくることに気が付く
馬は既に丘を駆け下りはじめ、すれ違う
彼らの息遣いを受ける
その美しさ
道の先に霧は濃くなって
たまらず振り返ったが
尻尾は大きく揺れて消えてしまった

Alpenglühén

霧を割って地平線から太陽の円盤が現れる
赫赫たる山頂に宙の風の清々しさ

骨壺の冷たさ

成長しつづける壁を見つめる

わたしはそれが何者なのか判断しかねている

触れても尋ねても壊そうとしても干渉できない

その中は満ちている

ペーパームーン

ペッパームーン

ハロウィーンも間近に迫ったあの日の夜はとても冷たい雨が降っていた。走る道すがら頭蓋の中まで雨が打ちつけ、あなたの肩の細さと握りしめた手の硬さばかりが強く印象に残った。けれどこうして風に吹かれて思い出されるのは、黒い煮豆の美味しかったこと。焼酎を呑む父と祖父を見る目つきの面白さ。わたしを呼ぶ声の優しい響き。

つないだ手のそのやわらかさ

胸にピンクのガーベラ

耳飾りに白のガーベラ

そして髪にはオレンジのガーベラ挿して

晴れ晴れと風に吹かれて揺れている

歌と踊りに満ちたあなただけの王国がこの冥い星のどこかで生きている

あなたAI

菊池亮太

あなたAIをつくりました

あなたAIはあなたです

あなたAIはあなたなので

あなたと同じことばをしゃべります

あなたAIが身体をもちました

あなたAIはあなたです

あなたAIはあなたなので

あなたと同じうごきをします

あなたAIがころをもちました

あなたAIはあなたです

あなたAIはあなたなので

あなたと同じ感情をもっています

あなたAIはあなたです

あなたAIはあなたなので

あなたと同じことばをしゃべり

あなたとおなじうごきをして

あなたと同じ感情をもちます

あなたAIはあなたです

あなたAIがあなたと出会いました

あなたAIはあなたです

あなた A I はあなたなので

あなた A I は死んでしまいました

死んだのは本当あなた A I なのでしょう

あなた A I はあなたです

あなた A I はあなたなので

あなたが本当あなたなのか分かりません

窓辺の伊予柑

高木瞳

どうどうと曇りが埋め尽くす中に伊予柑

くるっと人の顔が映っておどろく

私になる前の人、誰か

立ち止まっては鼓動を挟る

あたたかくて耳たぶが痺れて恐ろしくなった

透明が次から次へと通りすぎていく

石よりふてぶてしく光る伊予柑

空までチリっとたじろぐから

か弱く泳がせてやる

遠くまで騒がせてやる

私は何でも知っている

目一杯走り去るまで縮こまる伊予柑

ポツと灯って脚をぶら下げる伊予柑

息を潜めながら目を閉じる伊予柑

それでもなお、私にこびりつきはしない

二回振り返ったあの伊予柑

美術の授業があり 「今日は、あなたの目の前にいる人を描きましょう」と
言われた私は

えんぴつを持って曲線と直線を描いた

『目の前の人』の顔を ふちどり、なぞった

黒く汚れた指をこすって

私は私が間違ったことをしているということについて考えた

『目の前の人』は私に向かって話しかけた

夏より冬が好きでコートを三着持っている

朝起きると最初にラジオの電源を入れて洗面台を磨く

『目の前の人』の口は 開かれ閉じて『あなた』をかたどる

『あなた』が笑う

『あなた』は楽しいのだろう

『あなた』が「私はこれが好き」と言う

『あなた』はこれが好きなのだろう

あふれる『あなた』『あなた』『あなた』『あなた』『あなた』を一本の線で描く私を

私は信じていたくなかった

胸が騒ぎ水滴が落ちた

目の前の『あなた』の姿が滲む

『あなた』をふちどるえんぴつが消えてしまえばいいと願う

『あなた』は静かに『私』の背中を撫でる
『私』は黙っている

歪な生命体

小林大輝

齒車の欠けた歪な生命体が
ぼんやり歩いている
油のないブリキの腕を振りつつ
もう何年も動作を続けている
齒車の欠けた歪な生命体は
さみしい浜辺を静かに歩いている

浜辺は今日もおだやかで
だけでもどこかなしい白浜で
昔の文明の残骸のみが堆積している
古ぼけて反射を忘れたレンズには
昔見た一枚の写真のみ投影される
なんとなく幸せそうな顔の写真
なんとか思い出そうとするのだけでも
写真の顔がドロリと解けて猫になる
ネズミになる
犬にも見えるし
赤子にも見える
古ぼけたレンズに
顔は映らない
覚えられない
なぜだかとてもかなしい気持ち
が空虚な胸をたたく

歪な生命体は

また浜辺を歩き続ける

星月は変わらずに運行し

浜辺はなおも青く穏やかである

歪な生命体は歩き続ける

ふと目をやれば今はもうそろそろ

夜明けに向かって空が白んでいる

生命体は静かに歩き続ける

カメラロール喫茶の起床

鈴木はる香

レモンが植えられた皿の肌をなでる

コーヒーが息を吸って吐き出した、漂う白いベールが風に巻かれて渦になっている

私は黒色を白で操った

目に入ってきたものを網膜でじっくり触って、
降ってきた羽を逃がさないようにして、

次が浮かばない時は、髪で顔を覆う
外にいる私を、内側。内側へ。

「世界」

を何と言おうか
考えている

机の木の実に架かっている橋たちを、削るように指でなぞって問いかけてみる

が、応答はない

この詩の終わりが見えない

ケーキとコーヒーを中途半端に生き残らせてみた

「る」と「た」で迷って「る」。「た」。

カップの体温と溶け合ったコーヒーはすっかり冷たい

「私はノートの罫線幅を気にしたことがない」と書いている今は、気にしている。

電流が届かない矢印はどこへ向かっているのか

カップソーサーの周りを夕焼けで照らしているランプの中で詩をうたいたい。

カウンター越しの店主が置いた砂時計の砂が下に落ちる前に寝そべりたい、くびれ。

ガスコンロのチチチチチ

頭の目に写る、眠たそうな冬の顔

下手な笑顔は湯気の表面にくっきり映るからそのまま

詩人の誕生

谷内柊太

歌が聴こえる。優しい歌だ。私は海の深くにいて、その声の温もりに依存しようとしている。これは恋だろうか？ もっと深いものだった気がする。それでも僕は一向に見えてこない歌い手の頬を撫でようと、両腕を力強く伸ばしていた。あと少し。あと少しで水面を破って、心地いい空気の世界に突き抜けられる。その時、一発の銃声と共に、あたり一面の海水が赤く染まった。

はと目が覚めた僕にはここがどこで、今がいつなのか皆目見当がつかなかった。携帯を確認する2047年5月、そこまで視界に入って、やっと僕は夢の濡れた幕を振り払うことができた。もう朝か、支度して大学に行かないと。外では忙しない東京の街が既に目を覚ましており、電車の振動がかすかに伝わってきた。白米と目玉焼き、味噌汁を用意して、携帯でニュースを見る。

「不適切言語運用取締法違反者、昨日は5人。」

もう見慣れた、なんてことないニュースの一つにそんなものがある。これは2027年、僕が生まれた年、に施行された法律で、我が国での『詩的』言語運用を禁止するものであった。反対の声もあったらしいが、言論の自由の部分的規制は本当は誰一人殺すこともできないし、すっかり視聴者が分散したオールド・メディアや、老衰してゆく読者を奪い合う書籍には政府の意向をどうにかする力はなかった。むしろ、コスパやタイパの名の下に効率を愛する現代人は詩という無駄の権化のようなものを退けることに若干の熱狂すらあった。不適切言語運用取締法に違反すると、違反者専用の刑務所で25年間を過ごすことになる。海外でも、この詩の廃絶は起こっていた。主な原因は2025年高明な大学の研究所の発表で、詩的言語運用が社会における発達障害や境界知能の増加に大きな影響を与えているということが明らかに

なったのだ。発達障害や境界知能、特に ADHD なんと言葉は近年広く認識されるようになり、また、人々の大きな恐怖の対象でもあったのだ。

日本の平凡な日々に変化は殆どない。音楽から歌詞がなくなり、本屋は自己啓発本やビジネス本で埋め尽くされるようになった。広告やポスターに記号が増え、文字が減った。大学の授業から難解なものが一つ減った。サラリーマンは働くし、ニートは引きこもるし、政治家は偉そうな顔をしているし、メディアは大衆を煽動しようとする。友達は笑っているし、知り合いの知り合いは気まずそうにする。大学の先生は過剰に上から目線な人もいれば、優しい人もいる。日常は何一つ変わっていない。

大学に行くと、いつものように友達と会ったり、サークルの部室に寄りして、授業を受ける。今日も平凡な木曜日だ。僕は用事があつて図書館に行くと、不思議なことに気付いた。この図書館には確か地下なんてないはずなのに、そこには地下への階段があつたのだ。僕は自分が夢でも見ているんだろうと思い、その階段を降った。するとそこには一冊の本もない世界があった。こんなのはますます不思議だと思う自分と、どうせ夢なのだからという自分が混在していた。全くの混乱の中、戸惑って後退りすると、ドンっと何かにぶつかる。

「しっかりせんか、若いの。」

そこには長い長い白髭を蓄えた仙人みたいな外国人の老人がいた。

「ここは……どこ？」

「ここは裏図書館だよ。気まぐれに『詩人』を迷い込ませては、からかっているんだ。これでもわし、詩が好きな人間の間では有名なんじゃが。」

「いや、僕、『詩人』なんかじゃありません！ 詩に興味ありません！」

「おや、とんだ詩嫌いがこの図書館に選ばれたみたいじゃな。」

「おじいさん、詩なんて……怖くないんですか？ 日本じゃ逮捕されるんですよ！」

するとおじいさんはひどく驚き、そして悲しそうな反応を示した。

「そうかそうか、わしは昔、詩を愛した者じゃ。君にわしらが育てた草の種

を渡そうじゃないか。いらなと思うたら捨ててもらって構わんよ。」

「草の、種？」

「そうじゃ。」

「わ、分かりました。」

すると、老人は重い咳払いをすると、一つの長い何かを聞かせてくれた。それは何か、沢山の矛盾を抱えていて、ボロボロの布みたいにみすばらしくて、しかし音楽的で、さも意味があるように聞こえる。「僕」そのものを探しているようで、でもどうしようもなく外世界からの救いのように「あなた」を求めている。聴かれることを強く切望していて、でも易々と触れてほしくないように。全てをあらわにしているのに、ありとあらゆるところに何かひそんでいて、そして好かれるとか、嫌われるとかを全く気にしていないようだった。ただ、深く深くまで降りてきて、抱きしめて欲しいだけなんだろうか？ 世界征服でも目論んでいるんだろうか？

老人が最後の一節を終えた時、何故か胸が温かくなった。

「わしはな、これは詩だと信じておる。」

老人は言う。

「君も探してみるといい、ふと何かを言葉にしてみたいと思える瞬間を。」

老人の名前も聞き忘れたまま、来た道に戻るともうそろそろ次の講義の間だった。僕は急いで教室に駆け込む。不思議な気持ちだった、ドアが閉まること、ペンが落ちそうになること、知らない人が寝ていること、ありとあらゆる「こと」に何か別の言語表現がないのか、考えてしまった。教授の念仏のような講義にリズムとメロディーをかすかに感じてしまった。また、そのことすらも何か別の表現方法を考えてしまった。それは帰り道になると、とうとう頭の中を独占しだした。木が揺れること、ゴミが落ちていること、それを見ても見ぬふりして人が通り過ぎること、この視界の中にその三者が共存していること。電車が定刻通りに来ること、沢山の人が乗っているのに誰も話しかけないこと、とにかくこの世界には「くぐりであること」をそれ以外の表現で表すことができるのではないか、と考えてしまった。そしてつ

いに僕は家の近くの自動販売機にフェンスが反射していることに「し」と言
ってしまった。今日は平凡な木曜日なのでしょいか？

神楽坂2047（フタマルヨンナナ）

米山すみれ

はじめに安らぎがあった
そして痛みが生まれた

心臓から流れ出した温度が
凍った皮膚に麻酔を打った
氷のつぶてが腿を刺し
カラダは外から眠っていく

人工呼吸器をつけた子供が
毘沙門天へ運ばれていく
観客は指折り数えて
花火と共に少女は死んだ

溶けたマンシヨンの輪郭と空が
黒い絵の具を地面に落として
そうしてできた黒い染みから
薄暗い音楽が聞こえる

研ぎ澄ましてくれ もっと
キックが体を貫いて歪んだ光は脈を打つ
何かを吐き出したい気持だ
夜の間に溶けていきそうだ

はじめに安らぎがあった
そして今痛みは生まれた

キタイ

時崎夏姫

ここ数日、数週間、数年。ずっと眠ることができなかった
あのタオルケットのような暖かさを感じた
涙が出るくらいお腹の中で星が跳ねたんだ

でも忘れていたんだよな。

目覚めたら何もかもなんだかよく見えなくなって
うまく吸って吐いてができなくなった

大切だと思っていたものも有害成分を含んで

0・5秒漂ってどこかに消えていった
どんだん僕を腐らせていく

僕はオレンジのおひさまがただ欲しかった
いつか手に入れられるんだろうなって
周りのみんなが消えてしまうくらいには
待ちました

これで全てが救われて
これで楽になれると

僕、信じていたはずなのに
振り返ればずっと後ろにいる僕みたいな奴より
僕はずいぶんとボロボロになって血だらけなんだ

「ああ、またやってしまったね。」

その言葉と共に僕の口から

星が吐かれていったよ

逃げられたんだよ

僕忘れないよ、その嘲笑う顔。